

校名： 横浜国立大学教育人間科学部附属横浜小学校

所在地：〒 231-0845

電話番号： 045-622-8322

記載日：平成28年 5月20日

記載者： 中山 光恵

記載者役職： 副校長

貴校の校風、おおまかな特色について：

横浜小学校は、山手駅から5分ほど上った丘の上にあります。西には富士山、東には横浜港やベイブリッジ、北にはランドマークタワーが見えます。

平成28年度に創立107年目を迎えました。創立以来、知的好奇心旺盛で人間性豊かな児童の育成をめざしています。

本校では長年に渡り『子どもにとって本当に必要な学びとは何か』を模索し続けてきました。平成28年度の研究テーマは、「共に学びをつくりあげる子どもの姿を追い求めて」です。低学年での生活総合科や3年生以上の総合単元学習はもちろん、教科学習のあらゆる場面で「共に学びをつくりあげる」子どもの姿を見とり、子どもが学習の主体となる学びを創造しようと新たな単元開発や教育課程づくりに取り組んでいます。



貴校の卒業生の活躍状況について：

卒業生は、約半数が附属横浜中学校、約半数が私立中学校へ進学します。それ以降の追跡調査はしておりません。

それ以降の追跡調査は特にしておりませんが、会社の社長などの実業家になっている人が多いようです。

貴校勤務経験者の先生方が公立学校・教育委員会などへ戻られた後の活躍状況について：

本校の副校長・主幹教諭・教諭・養護教諭は、教育委員会との人事交流により派遣されている職員です。5～6年で、それぞれの教育委員会へ、校長や副校長または教頭、主幹教諭、教諭、指導主事などとして戻ります。戻る時は、附属学校で研究をしてきた経緯から、研究主任や研究推進委員などで活躍する場合があります。

魅力のある、特色のある、または、今後、公立学校へも展開できそうな先導的な取り組みなどについて：

毎年、各クラスで立ち上げる「クラス総合単元学習」では、子どもの興味・関心だけでなく、専門性を持った外部講師とのつながりをもつこと、活動内容や活動場所が学校だけの枠にとらわれずに発展性や広がりのあることなどを念頭に、活動や材を選んでいきます。

時には大学や地域の方、表現系の活動では劇団やアーティストの方々、創作系ではクリエイターや外部団体の講師など、幅広い分野の専門家に子どもたち自身がアポを取り、学習への必要感をもって交渉していくことを大切にしています。

活動や材そのものの魅力だけでなく、人とのつながりや学習過程を大切にしており、自ら立案し、成し遂げるために必要な力を、身に付けるようにしています。それらの活動には子ども同士が互いの協力し団結していくことが不可欠であり、課題を乗り越えていく上でも「共に学びをつくりあげる」必然性が生まれてきます。

あるクラスでは音楽家を講師に招き、自分たちでつくったカホンの演奏会を実現しました。また、あるクラスではペットボトルキャップアートを通じて、キャップがワクチン基金になることを知り、学びを深める活動へとつながりました。料理に使われる出汁（だし）に興味を持ったクラスでは燻製機を用いて鰹節を作り、横浜の海で鰯を釣って煮干しを作るところから始めました。

これら発展的な取り組みは「総合単元学習」だけではなく、「教科学習」においても同様の効果が生まれます。また、学習活動以外の野外活動や特別活動に於いても子どもが自ら考え、企画立案し、つくりあげていくことを教師集団がサポートする形をとっています。

3年生から始まる清里野外教育施設における山荘学習は、活動そのものは子どもたちの企画立案により2泊3日（3・4年生）もしくは3泊4日（5・6年生）を、どのように過ごすか実行委員を立ち上げて検討していきます。

子ども一人一人が、それぞれ役割を担い、プロジェクト活動や生活環境を自ら整え、山荘学習全体をつくりあげていきます。4年間、同じ場所、同じ宿舎で寝泊まりするため、天候不良に際しては臨機応変に活動の順番を入れ替えたり、雨天用のプログラムを急遽作ったりするなど、普段から「つくりあげる」活動をしているからこそ、柔軟な対応ができることも、山荘学習の醍醐味のひとつです。

ある6学年の取り組みは「自分たちの力で清里の思い出料理を作って食べたい」というものでした。そこで、子どもたち自らが現地の直売所で現地の食材を購入し、火起こしから配膳まで、すべてを体験する活動を行いました。

慣れない火起こしに苦戦する姿、食材の量や味付け調整に苦労する姿がありましたが、その一方で、最後の片付けまで「全て子どもたち自身の力でやり遂げる」ことができました。



これらの取り組みは、日々の学習活動の中で培われているものです。『自分の考えを表現できる』『他者の意見を尊重する』『みんなで決めてみんなで協力していく』本当の意義を普段から経験しているからこそ、できる活動だと考えています。

「多数決を良しとせず、話し合いを突き詰める」こと、「学年全体という大人数での話し合いでも、個人の意見を大切にできる経験」など、『学校全体として大切にしている取り組み』を通して、仲間を信じ、自分の意見を言い、自ら仲間に協力する子どもの姿を、学習だけでなくあらゆる場面で育てていきたいと考えています。

学校全体として大切にしている取り組み

少数意見を大切にし、こだわりをもって話し合いをすすめる姿

1年生・2年生

生活総合科を通じて
個人での追究する力を高める

「自分がやりたいことを とことん追究する」

全ての学年において、
発達段階に応じたかたちでの全員会議＝「学年集会」

ステップ Up

3年生・4年生

総合単元学習の始まり

「自分で考え、活動を生み出し、実行する」

学年全体の活動をつくり上げるため、
中心となる＝「実行委員」

様々な活動を通して、自ら立案し、やり遂げる力をはぐくみ発揮する経験を積み重ねていく。

山荘学習(2泊3日)

同じ場所での宿泊を積み重ねることで、自ら活動を作ろうとする意識を高める。

帰国児童の受け入れ

多様な文化や考え方、立場の違いを知ることで他者意識を高める。

5年生・6年生

「目標をつくり、理想とする姿に向かって全体で追究する」

総合単元学習で自ら学びを広げ、深めようとする姿

クラブ活動
学年を越えた自治的な活動を目指す

山荘学習(3泊4日)

学校や学年を見据え、なりたい自分たちの姿を目標に掲げ、活動を具体化する。

高学年ならではの取り組み

運動会
学校全体をリードする

委員会活動
各委員会の特色を生かした活動の自発的提案



学年を超えてつながるペア活動

地域において、現在、貴校はどのような存在であると考えますか：

一昨年度は山梨県の学校研究のための参観、昨年度は和歌山県有田市などの教育委員会の視察など、県外からも授業公開を求められることがあります。また、県内の公立学校からは、多くの講師派遣依頼を受けています。神奈川県内の教育委員会では研修の一部を、本校での学びの姿をもとに行うなど、出張授業や参観による研修会に協力しています。

附属学校の存在意義、貴校の存在意義について：

本校は、大学からの要請により、教授と共に学生が授業見学に来たり、授業後の協議会に職員が参加して講義をしたりするなど、積極的かつ現場主義の連携を深めています。教員養成を目的とする大学が、講義の延長として学生を帯同し、現場を訪れることができることは多大なる価値があることだと考えています。

また授業を見られる附属学校の現職教員としても、学生とのやり取りの中で、子どもたちの様々な学習課題に気付かされることや、「学びとは何か」考えを見直すきっかけをもらうこともあります。



近年では、公立学校での授業研究も盛んになり、研究指定校の数も増えてきているとはいえ、大学と密に連携をとり、いつでも授業公開している学校は少ないと思います。そんな中でいつでも門戸を開いている国大の附属学校の存在は、本校に限らず貴重な存在と言えます。



本校は神奈川県下の地域にとっても、開かれた研究校としての役割があります。研修や研究の場として、勉強会の会場として、場設定を行う場合もあります。教育委員会からの要請による研修会や、算数授業力向上講座などの取り組みにも協力しています。

また、地元・横浜市の教育研究会にも積極的に参加し、授業を元にした実践提案や協議会に参加するなど、情報共有にも努めています。

附属学校は、大学との「縦の連携」だけでなく、各教育委員会や地域の公立学校などと、「横の連携」も大切にしていかなければなりません。その中で、独自の教育理念を追究し、新たな学びのあり方を提案していく創造的な学校であるべきと考えています。それが神奈川県内の市区町村、川崎市、横浜市、相模原市の各地域から集い、日々研鑽を積んでいる横浜小学校教職員が大切にしていることです。